

1 実ベクトル空間と部分空間

復習と確認 1.1 $n \times n$ 正方行列 A に関して, 対角和 $\text{tr} A$, 階数 $\text{rank} A$ および行列式 $\det A$ が計算できる.

復習と確認 1.2 3×3 正方行列 A に関して, 逆行列 A^{-1} が計算できる.

復習と確認 1.3 $n \times n$ 正方行列 A に関して, $\text{null} A = n - \text{rank} A$ を退化次数 (ナリティ) という.

復習と確認 1.4 $n \times n$ 正方行列 A において, 斉次方程式の解集合 $\{x \in \mathbb{R}^n \mid Ax = 0\}$ は,

- (1) A が正則であるとき, 自明解 $x = 0$ のみ.
- (2) A は非正則であるとき, 非自明解を持つ.

が成り立つ.

定義 1.1 集合 V の元 $\{v_i\}_{i=1}^n$ に関する重み $\{a_i \in \mathbb{R}^1\}_{i=1}^n$ つきの和

$$\sum_{i=1}^n a_i v_i = a_1 v_1 + a_2 v_2 + \dots + a_n v_n$$

を線形 (一次) 結合あるいは線形和という.

定義 1.2 集合 V の元 x, y に関して

- 和 $x + y$
- 実定数倍 ax ($a \in \mathbb{R}^1$)

が定義され, これらが V に属し,

- 和の単位元の存在 $x + 0 = x$
- 和の逆元の存在 $x + (-x) = 0$
- 和の結合則 $(x + y) + z = x + (y + z)$
- 和の交換則 $x + y = y + x$
- 積の零因子の存在 $0x = 0$
- 積の単位元の存在 $1x = x$
- 積の分配則 $a(x + y) = ax + ay, (a + b)x = ax + bx$

を満足するとき, V を実ベクトル空間という.

命題 1.1 実ベクトル空間 V の任意の線形結合 $\sum_{i=1}^k a_i v_i$ は, V の元である.

証明 $\{v_i \in V\}_{i=1}^k$ から, $x = a_1v_1 + a_2v_2 \in V$ かつ $y = a_3v_3 \in V$. したがって,

$$x + y = a_1v_1 + a_2v_2 + a_3v_3 \in V.$$

あらたに, $x = a_1v_1 + a_2v_2 + a_3v_3 \in V$ および $y = a_4v_4 \in V$ として,

$$x + y = a_1v_1 + a_2v_2 + a_3v_3 + a_4v_4 \in V.$$

これを繰り返して, $\sum_{i=1}^k a_i v_i \in V$.

定義 1.3 実ベクトル空間 V の部分集合 W の任意の元 x, y の線形結合 $ax + by$ ($a, b \in \mathbb{R}^1$) が W に属するとき, W を V の (線形) 部分空間という.

命題 1.2 実ベクトル空間 V 上のベクトル $\{v_i\}_{i=1}^k$ の線形結合によって表される集合を $\langle v_1, v_2, \dots, v_k \rangle$ と表記するとき, $\langle v_1, v_2, \dots, v_k \rangle$ は, V の部分空間である.

証明

$$W = \langle v_1, v_2, \dots, v_k \rangle = \left\{ \sum_{i=1}^k a_i v_i \mid a_1, a_2, \dots, a_k \in \mathbb{R}^1 \right\}$$

より, 任意の 2 ベクトルを

$$x = \sum_{i=1}^k a_i v_i, \quad y = \sum_{i=1}^k b_i v_i \in W$$

とするとき,

$$\alpha x + \beta y = \sum_{i=1}^k (\alpha a_i + \beta b_i) v_i \in W.$$

定義 1.4 $\langle v_1, v_2, \dots, v_k \rangle$ を, ベクトル $\{v_i \in V\}_{i=1}^k$ によって張られる部分空間という. また, $V = \langle v_1, v_2, \dots, v_k \rangle$ であるとき, V はベクトル $\{v_i \in V\}_{i=1}^k$ によって張られる実ベクトル空間であるという.

例 1.1 \mathbb{R}^2 上のベクトル

$$v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \quad v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

を考える.

(1) 部分空間 $\langle v_1 \rangle = \left\{ t \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \mid t \in \mathbb{R}^1 \right\}$ は原点を通過する直線である.

(2) 部分空間 $\langle v_1, v_2 \rangle = \left\{ t \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + s \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \mid t, s \in \mathbb{R}^1 \right\}$ は平面であり, \mathbb{R}^2 を張る.

(3) $\langle v_1, v_2 \rangle$ は, $s = 0$ とすると $\langle v_1 \rangle$ に一致する. よって, $\langle v_1 \rangle$ は, $\langle v_1, v_2 \rangle$ の部分空間である.

(4) 部分空間 $\langle v_1, v_2, v_3 \rangle$ は、以下のように整理できる .

$$\begin{aligned}\langle v_1, v_2, v_3 \rangle &= \left\{ t \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} + s \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} + u \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} \mid t, s, u \in \mathbb{R}^1 \right\} \\ &= \left\{ \begin{pmatrix} t+u \\ u+s \end{pmatrix} \mid t, s, u \in \mathbb{R}^1 \right\}\end{aligned}$$

ここで、係数を置き換えると、

$$\langle v_1, v_2, v_3 \rangle = \left\{ \begin{pmatrix} t' \\ s' \end{pmatrix} \mid t', s' \in \mathbb{R}^1 \right\} = \langle v_1, v_2 \rangle .$$

よって、2つの部分空間は \mathbb{R}^2 に一致する .

今回のポイント 1.1 “ベクトル集合 $\{v_1, v_2, \dots, v_n\}$ が線形空間 V を張る” とは、 $\{v_1, v_2, \dots, v_n\}$ に沿って、原点から任意の点 $x \in V$ まで到達できるルートが存在するという意味である . 但し、この状況では、ルートは唯一ではないことに注意する .
